

第82回

休日の 午後のコンサート。

休日の午後のコンサート

12.1 (日) 14:00開演

東京オペラシティ コンサートホール

Sun, Dec 1, 2019, 14:00

at Tokyo Opera City Concert Hall

〈愛の挨拶〉

Salut d'amour

指揮とお話 円光寺雅彦

Masahiko Enkoji, conductor & speaker

チェロ 山崎伸子*

Nobuko Yamazaki, cello

コンサートマスター 依田真宣

Masanobu Yoda, concertmaster

ショスタコーヴィチ：祝典序曲 Op. 96 (約6分)

Shostakovich: Festive Overture Op. 96 (ca. 6 min)

マリー：金婚式 (約4分)

Marie: La cinquantaine (ca. 4 min)

チャイコフスキー：ロココの主題による変奏曲 イ長調 Op. 33* (約20分)

Tchaikovsky: Variations on a Rococo Theme in A major, Op. 33 (ca. 20 min)

— 休憩 intermission (約15分) —

クロード・フランソワ：マイ・ウェイ (約4分)

Claude François: My way (ca. 4 min)

スメタナ：歌劇『売られた花嫁』序曲 (約7分)

Smetana: Overture from opera "Bartered Bride" (ca. 7 min)

スメタナ：歌劇『売られた花嫁』より“道化師の踊り” (約3分)

Smetana: Dance of the Comedians from opera "Bartered Bride" (ca. 3 min)

ボロディン：歌劇『イーゴリ公』より“だったん人の踊り” (約25分)

Borodin: Polovetsian Dances from opera "Prince Igor" (ca. 25 min)

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業） | 独立行政法人 日本芸術文化振興会

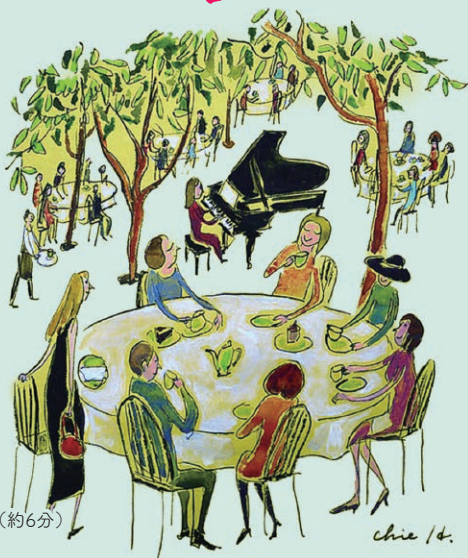
Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan | Japan Arts Council



文化庁
Agency for Cultural Affairs,
Government of Japan

イラスト：ハラダチエ



12/1

12.1

円光寺雅彦 指揮とお話

Masahiko Enkoji, conductor & speaker

桐朋学園大学指揮科卒業。指揮を斎藤秀雄氏、ピアノを井口愛子氏に師事。1980年ウィーン国立音楽大学に留学しオトマール・スウィトナー氏に師事。これまでに東京フィル指揮者(1986-1991)、仙台フィル常任指揮者(1989-1999)、札幌交響楽団正指揮者(1998-2001)などを務め、2011年から2019年3月まで名古屋フィル正指揮者として数多くの名演を共にしてきた。



©K.Miura

NHK交響楽団、東京フィル、読売日本交響楽団、東京交響楽団、新日本フィル、大阪フィル、広島交響楽団、札幌交響楽団をはじめとするほとんどの国内オーケストラ、海外では1992年プラハ響定期演奏会、1994年BBCウェールズ響、1995年ベルゲン・フィル、1998年1月フランス・ブルターニュ管弦楽団に客演し、深い音楽性と適確な指揮で多くの聴衆を魅了してきた。

テレビ等の番組にも定期的に出演するなど、幅広い活躍が続けている。

山崎伸子 チェロ

Nobuko Yamazaki, cello

広島生まれ。桐朋学園大学音楽学部卒業。斎藤秀雄、レイヌ・フラシヨー、堤剛、安田謙一郎、藤原真理各氏に師事。

第1回民音室内楽コンクール第1位、第44回日本音楽コンクール・チェロ部門第1位。卒業後、文化庁海外派遣研修員として、ジュネーブでピエール・フルニエに師事。



©武藤章

2007年より10年にわたり津田ホール、浜離宮朝日ホールでチェロ・ソナタ・シリーズを開催し、2017年5月に紀尾井ホールで最終回を迎え、好評を博した。2018年12月にはライブ録音した「J.S. バッハ：無伴奏チェロ組曲全曲」をリリース。2017年度からフィリアホールにて山崎伸子プロデュース「未来に繋ぐ室内楽」と題し、優秀な若手演奏家の紹介と室内楽を共演するシリーズを開催している。

現在、桐朋学園大学特任教授、東京藝術大学名誉教授。使用楽器はヒエロニムス・アマティ 1641年製。

プログラム・ノート

解説＝柴田 克彦

12.1

多彩なプログラムで満喫する〈愛の挨拶〉コンサート

今回の「休日の午後のコンサート」は、指揮者の円光寺雅彦とチェリストの山崎伸子“夫妻”がおくる〈愛の挨拶〉です。といってもこのタイトルで真っ先に浮かぶエルガーの「愛の挨拶」が本プログラムに組まれているわけではなく、東京フィルの副指揮者としてキャリアをスタートさせた円光寺マエストロと、日本を代表するチェリストとして東京フィルと何度も共演してきたパートナーの、“東京フィルへの”愛の挨拶、“音楽そのものへの”愛の挨拶、そしてもちろん“聴衆への”愛の挨拶がこめられたコンサートといえるでしょう。

祝い事の曲や愛が絡んだ音楽もありますが、中心をなすのはロシアと東欧チェコの明快な名曲や民族的な作品。東京フィルのダイナミックなサウンドや各パートの高度なテクニックが存分に発揮される内容でもあります。

華やかな音楽あり、しっとりした音楽あり、血沸き肉踊る音楽あり、ソロの名人芸ありの多彩なプログラムを、大いに満喫しましょう。



©上野隆文

12/1

12.1

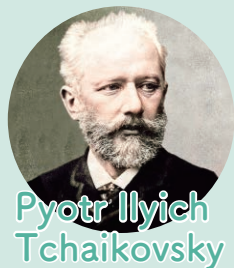
吹奏楽の大定番「祝典序曲」と 小学校の教材にもなった「金婚式」

コンサートは、旧ソ連を代表する作曲家**ドミトリー・ショスタコーヴィチ**（1906–1975）の「**祝典序曲**」で華やかに幕を開けます。ショスタコーヴィチには、西欧の現代音楽に寄ったシリアスな作品と、社会主義讃美路線に沿った明快で平易な作品があり、本作は後者の典型例。経緯には諸説あるのですが、現在は「1954年の十月革命37周年記念日のために、共産党中央委員会からの委嘱で作曲された」との見方が有力視されています。何はともあれ、明るく爽快な曲調ゆえに人気も高く、特に吹奏楽では大定番曲となっています。ファンファーレに始まる序奏からプレストの主部へ移行。クラリネットが出す第1主題とホルン等が出す第2主題を軸にした活気溢れる音楽が続き、ファンファーレに戻った後、華やかに終結します。

おつぎは**ガブリエル・マリー**（1852–1928）の「**金婚式**」。マリーは指揮者としても活躍したフランスの作曲家ですが、本作のみで名が知られています。この曲は、親しい人の結婚50周年＝金婚式のために作曲されたともいわれていますが、正確な経緯は不明。しかし小学校の鑑賞教材になるなど古くから親しまれており、原曲の管弦楽版やピアノ版のほか、ヴァイオリン版など種々の編曲でも愛されています。曲は、哀感漂うカヴァット調の音楽。クライスラー風のメロディが流れる短調の主部に、やや明るめの中間部が挟まれます。

チェロ協奏作品の中でもその優美さと 繊細さが光る大人気曲

前半最後は、ロシア最大の作曲家**ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー**（1840–1893）の「**ロココの主題による変奏曲**」。チェロの協奏作品中、最上位クラスの人気曲です。生涯最初の充実期の1876～77年にモスクワ音楽院の教授（すなわちチャイコフスキーの同僚）だったドイツ出身のチェリスト、ヴィルヘルム・フィッツェンハーゲンのために作曲され、1877年に初演されました。「ロココ」とは、18世紀フランスのルイ15世の宮廷から始まった、バロックに続く美術様式で、ここでは宮廷的で優美な趣を意味しています。



Pyotr Ilyich
Tchaikovsky

しかしこの曲、初演前にフィツェンハーゲンが独奏パートを変更した上、無断で第8変奏をカットし、変奏の順番も大幅に入れ替えました。しかも作曲者の承諾なしに出版もなされ、この改変版によって普及していきました。ちなみにチャイコフスキーもなぜか異を唱えなかった模様。20世紀半ばにオリジナル譜が復元されていますが、いまだにフィツェンハーゲン版での演奏が主流です。

曲は、主題と7つの変奏が多彩な楽想とともに展開される、繊細で抒情的な音楽です。短い序奏の後、チェロが優美な主題（モデラート・センブリーチェ）を呈示。第1、第2変奏では主題が細かく刻まれ、第3変奏では美しい歌がたっぷりと奏されます。民族的な第4変奏、フルートの旋律をチェロが装飾する第5変奏からカデンツァを経て、哀愁漂うニ短調の第6変奏へ。そして快活な第7変奏とコードで華麗に締めくくられます。



ヴィルヘルム・
フィツェンハーゲン
(1848–1890)



ロココ美術の代表的な建造物とされるドイツ・ポツダムのサンズーシ宮殿の内装
©Janstoecklin [CC BY-SA 3.0]

シナトラの看板曲「マイ・ウェイ」をフル・オーケストラで

後半は、おなじみのポピュラー・ソング「マイ・ウェイ」で始まります。この曲はフランスの歌手クロード・フランソワ（1939–1978）が、1967年に発表した「いつものように」がオリジナル。これは愛の喪失をテーマにした寂しげな歌詞でした。しかしその歌を聴いたアメリカの歌手ポール・アンカが着目し、人生の終わりに自分が生きた道を堂々と語る内容の英語の歌詞に変えて、大歌手フランク・シナトラに提供しました。そして1969年に「マイ・ウェイ」の名で出されてシナトラの看板曲となり、以後多数のカヴァーがなされています。今回は、悠々としてどこか哀愁を帯びたご存じのメロディが、フル・オーケストラでいかに聞こえるか？が興味深いところです。

スメタナのボヘミア農村を舞台にした 歌劇から活気溢れる2曲



ここからは民族的なクラシック音楽。まずは“チェコ国民楽派の祖”ベドルジーハ・スメタナ(1824-1884)の歌劇『売られた花嫁』からの2曲です。スメタナは、スウェーデンで指揮者として活動後、オーストリア帝国からの独立の気運が盛り上がる母国で、民族主義的な音楽の主導者となり、チェコ語によるオペラの創作を開始。第2作の『売られた花嫁』(1866年初演。全3幕)で大成功を収めました。本編は、農家の娘マジェンカと恋人イエニークが、妨害や勘違いの末にめでたく結ばれるという、チェコ・ボヘミア地方の農民社会を舞台にしたコメディタッチの物語。音楽にも民族舞曲や民謡の要素が多く取り入れられています。

最初は有名な「序曲」。勢いよく出される導入主題に、細かな動きが力強く刻まれる第1主題、シンコペーションが特徴的な第2主題を加えて進行し、オーボエによる叙情的な主題などもまじえて、活力に充ちた音楽が展開されます。

続いて“道化師の踊り”。村の広場でサーカス一座の道化師が踊る第3幕の音楽です。無窮動風の急速な動きを主体に運ばれる、これも活気に溢れたナンバー。



ボヘミアの農村風景 Photo:Jan Miklin (Czech Republic and CzechTourism)

異国情緒と華麗な色彩感が横溢する “だったん人の踊り”

締めくくりは、アレクサンドル・ボロディン（1833－1887）の歌劇『イーゴリ公』より“だったん人の踊り”。ロシア国民楽派「5人組」の一人、ボロディンは化学者が本業の“日曜作曲家”でした。『イーゴリ公』は、1869年に着手したものの、本業が多忙のため未完に終わった作品。彼の死後、リムスキー＝コルサコフとグラズノフが補筆完成し、1890年に初演されました。全体の内容は、12世紀キエフ公国（ウクライナ）のイーゴリ公の愛国物語。ただし彼は、遊牧民族ダッタン人（正確にはポロヴェッツ人）と戦うも、捕らわれて捕虜になり、脱出して国に戻ります。

単独で名高い“だったん人の踊り”は、捕虜となったイーゴリ公を、彼に一目置く敵将コンチャーク汗がもてなす酒宴で披露される舞踊の音楽。異国情緒と華麗な色彩感が横溢した1曲です。優美ながらも悲哀に充ちた「娘たちの踊り」、シンコーション・リズムとクラリネットのソロに始まる「男たちの踊り」、ティンパニの打ち込みを伴う激烈な「全員の踊り」、軽快な「子供たちの踊り」が続いた後、各舞曲が交替し絡み合いながらクライマックスを形成します。



ロシアの画家イヴァン・ビリビンによる舞台デザイン



同じくイーゴリ公の衣装デザイン

しばた・かつひこ（音楽ライター）／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」（朝日新書）。